

シンポジウム

ディスカッション

Discussion

(司会 伊藤) まず、学校教育の中における体育という面からディスカッションを始めたい。高塚先生が今取り組んでおられるコミュニケーションの話は、体育に限らずすべての教科で、子どもたちに学ばせなければならない教育の基本的な課題だと思う。では、それをいったいどんな風に体育の授業で行えばいいのか。自分自身のことをどう表現すればいいのか分からない子どももたくさんいると思うが、では体育ではどんな風に取り組めばいいのか。

(高塚) 私が最後に高校の教壇に立った学校では、こんなこともありました。私に向かって、「先生、親戚の叔父さんに、赤碕高校に進学することになったと言ったら、お前は親戚の面汚しだと言われた」という生徒がいた。親も職場の中で、「あなたのお子さんはどちらの高校に進学されるのですか」と言われても高校名が言えない。県内でもこの高校の名前を聞いただけで、「あの学校か」と言われる学校の一つだった。平成8年から17年の9年間、心揺れる高校生と向かい合ったのは、鳥取県教育委員会に認めて頂いた「レクリエーション指導(人間関係体験学習)」という科目であった。1学年、2学年、3学年において1コマ50分の学習を2コマ連続で展開する授業を、平成8年からスタートした。当然、遠藤さんがお話しされたような、さまざまな野外活動も行った。心揺れる高校生に、人として「人の間に生きる」ということは、どういうことなのかを、学校の中の教科授業として体験学習をさせた。地域の中にある保育園に連れて行って、人生の始発期でもある0歳、1歳、2歳、3歳の乳幼児に、マンツーマンで、年間を通して向き合い関わりを持たせるという学習も行った。そして、人生の終末期でもあるお年寄りにも向き合わせていただ

き、人の間に生きるということはどういうことかを体験の中で気づかせ学ばせた。学校内で、基本的なマナーや人間関係を構築していくときに大切なコミュニケーションについて学び(基礎編)、実践編として地域に協力いただき、逃げ場のないマンツーマンの中で、継続的に幼い命と老いの命に向き合わせていただいた。家庭科の授業等では保育体験の中で1日体験はあるが、我々は継続して行うという特徴的な学習プログラムを作って、レクリエーション科目、別名を「人間関係体験学習」として世に打って出た。これが、うまくいった。乳幼児やお年寄りに関わり体験を終えた高校生が、「先生！俺みたいなものでも役に立っているんだよな！」「パートナーがまた来てな！待っているよ！と言ってくれる。俺のことを喜んでくれているんだ！」と、口にする高校生は少なかった。私たちは「役立ち感」として、声にするようになった。そばにいる人から喜ばれ、役に立ったという『役立ち感』が自分の存在に自信をもつ。高校生が自分を好きになっていく。だから、高校生が「先生！いい仕事してるなあ！」と、大人をからかうような、そんな言葉を口々に言い始めた。「おとうさんやおかあさんとうまくいかない、部活動もうまくいかない、その中で、この授業を毎週受けると、また頑張ってみようかなと、そんな気持ちになるんだ。そんな気持ちにさせてくれる授業をしてくれる先生に『ありがとう』だよ」と。高校生一人ひとりが継続的な学習の中で感じていく。そういうものを9年間ずっと実践していく中で、「役立ち感」というか、自分の存在に自信を持たせる、自分を好きになっていく、他者の間で生かされているということを、日々の生活の中で実感させることについて、うまくいった実践例なのかも知れない。

(伊藤) 今のお話について、草島先生は現場の立場として、どのようにお考えか。

(草島) 生徒たちは、自分が役立っているとか、自分が褒められているとか、そういう気持ちになることを実はすごく欲している。特に私に関わるような生徒たちは、家庭環境があまり恵まれているとはいえず、夜中もずっと外に出ている子が少なくないが、本当は誰よりも大人に褒められたいと思っている。ただ、コミュニケーションの仕方が分からないので、命綱なしで雨といを使って校舎をよじ登ってみるなど、危ないことをして注目を集めようとする傾向がある。でも、これがもしロッククライミングで同じように高いところへ登れたなら、誰もが「すごいね」と褒め称えるはずである。もちろん、学校教育現場で危ないことを褒めることはないが、もしもそういう褒め方ができるような場面が体育の授業の中にあれば、すばらしいと思う。

(伊藤) 遠藤先生の専門である冒険や野外活動は、危険と向き合わないといけないとか、有る意味自分のいのちを守るといことと直面している訳だが、そういう事について学校ではどんなことができるのかという点について、遠藤先生はどのようにお考えか。

(遠藤) 学校の現状がよく分からないので、理想になってしまうかもしれないが、例えば先ほどの災害に関係する草島先生のお話の中で荒れた道を走るというのがあったが、私の家は海と川に近く、津波の影響を受けやすい所で、しかも海側なので、川を渡らないと逃げられない。では、橋がなくなったらどうやって対岸に渡ればいいのかを考えていて、一つ思いついたのが高い塔を立てて、そこからワイヤーを伸ばしておいて、それを使って対岸に渡る方法で、それを真剣に考えている。そうすると、高いところに登ることやワイヤー1本で身を確保することなどは、普段からやってないと、いきなりはできないと思う。そういう意味で、普段の遊びや体育の中で、そういう経験ができないだろうか。

登るのは意外と簡単である。ロープを使って降りることを懸垂下降というが、ロッククライミングでも登ることはできても、降りるときに脚がすくんで動けなくなることがある。低い、安全なところからでいいので、学校教育のなかでできないだろうか。先ほどの提言の中で言った「体系化」とはそういうことである。リスク・マネジメントが大変とは思いますが、そういう一つひとつのケースを考えて、たとえば重いものを持って走るなど、出来る範囲でやっていくとよいと思う。

(伊藤) 遠藤先生のご専門では野外にでかけての実習的な活動になると思うが、それを学校の体育授業で行うにはどうすれば良いか。

(遠藤) 野外に行かずに、野外でできる体験を教室内に持ち込んで、そこで冒険をやるという方法は、人間のコミュニケーションを高めるとい目的ですで行われている。その中で有名なのがトラストフォールといって、高いところから、後ろ向きに倒れて、それを皆で支えるというものである。リスクは伴うが、そういう危険なことにチャレンジするには人間関係の信頼感(下地)が必要なので、大切なことは、しっかりやり方を説明して、最初に絶対的な約束としてフルバリューコントラクトを取り、チャレンジできる下地を作っていくことである。たとえば高さが5mでも10mでも、そういった下地があるかないかで危険性が変わってくる。そういった下地作りというのは、フロアーさえあればどこでもできる。これは最初に顔を合わせたオリエンテーションなどで約束しておくことが大切で、それは約束というよりも少し強制力のある契約のようなものであり、お互いを尊重し合い、助け合うのだという約束であり、なにが事あるごとにそれを振り返って、今回はちゃんとできていたかどうかを確認しながら、積み重ねていくことで、そういった安全の下地というものが出ていくと思う。

(伊藤) たとえば、小学校を卒業して、中学1年

生になって、一番最初の体育の時間に、そういうことをしないといけないと思うが、フルバリューということも含めて、草島先生のご意見は、

(草島) 中学1年生はいろんな意味で小学校の延長という感じなので、人間関係も小学校で培われたものが強く、学校生活のあらゆる場面において善し悪しの影響を及ぼしている。加えて中学校は、一校に複数の小学校から生徒が入学して来るので、入学当初の人間関係は、小学校のそれを鉄壁で守るというような「離れた関係」がある。なので、体育の最初の授業は、実は探り合って、見合っているような状況があると思う。その時点で遠藤さんの言うフルバリューは全くできていないが、それを作るための授業をプログラムとして組み込んでいければ、3年間の人間関係はかなり変わるのではないかと思う。

(伊藤) 高塚先生、コミュニケーションと深く関係があると思うが、いかがか。

(高塚) いろんな大学の教授の方たちが、最近の学生はちょっとね・・・と言う。保育関係、看護関係など様々な大学に、コミュニケーションの授業で招かれるが、その先生方はやはり大切なものはコミュニケーションだとおっしゃる。それは基本的なマナーや人と向き合って人間関係をゼロから構築していくことなどである。このコミュニケーションをすることにしんどさを感じる学生がいる。それは我々大人も、この時代の中で感じているのかも知れない。鳥取大学医学部では1年生が90分×2コマ×15週、2年生もその半分で、驚くほど多くの講義時間をいただいている。あらためて、自分自身と向き合い、自分自身の生き方やふだんの人間関係のあり様について見直す場を学生に「気づきの体験学習」というやり方で投げかける。先ほど遠藤先生の話しの中で出てきた「わかることと出来ることの違い」みたいなもので、わかっているが、できない。たとえば、大人社会はどうしてこんなに「挨拶」が大切だと言うんだ

ろうか。あらためて、挨拶はなぜ大切なのか。医学科の学生でも、一般の学生でも、そういうことに90分の講義時間を割く。つまり、人の間に生きるということはどういうことなのか、自分も大切だがそばにいる人も大切に思う気持ちというか、他者との関係の中で自分が生きているということ、大学キャンパスで「気づきの体験学習」を体験しながら気づき学ぶ。実践編では地域に出向いて乳幼児やお年寄りにお世話になるという学習方法を組み立ててしているが、大学教育では、やはり遅いと思っている。そうすると、やはり小、中、高の段階でやらなければならない(就学前の6年間の親子関係はもっと大切)。人の間に生きるということはどういうことなのか、仲間と気持ちよく体育活動をするにはどうあったらいいのか、クラスの仲間と落ち着いて算数、国語、理科、社会を学ぶには、お互い仲間とどうあったらいいのかなど、クラスの中で人間関係を構築していくために、たとえば集団行動の中でひと捻り、ふた捻りすればやれるのではないか。現場で今働いていらっしゃる保健体育の教職員は学生時代にコミュニケーション教育など学ばれたことはない。あらためて、今の時代「クラスの人間関係をどう構築していくのか」が問われる。仲間とぎくしゃくしない、より良い人間関係を構築していくには全教科、全教職員でやらなければならないが、体育の授業ならやはり集団行動だと思う。そういう領域があるから、ひと工夫、ふた工夫してトライしていくのもいいと思う。

(伊藤) 遠藤先生は、先ほど指導方法として、マスターするまで教えないとか、振り返る、褒める、励ます、ダメと言わないとか、痛みを伴うようなことをさせるとか、7つの事項をあげていたが、これは先生から私達へのアドバイスだと思う。もう少し詳しくお話し頂き、それを受けて草島先生に現場でそれをどう指導していくのかをお話し頂きたい。

(遠藤) 7つというのは、①教えない、②振り返りのしかた、③心の安全をどう作るか、④マ

スターするまで遊び込む、⑤褒める、励ます、⑥ダメと言わない、⑦No pain, no gain, この解釈は色々だが、私は痛みなくして得るものなしと考えているので、そういう意味では、自然から痛みをもらい、そこから教訓を得る。①については、基本的な技術はもちろん教えるが、それ以上技術を上達させることに主眼があるのでなく、本人達の体内感覚をいかに高めていくかというところを大事にしたいという意味である。②は評価につながるのだが、効果、評価、成果はやる前とやった後で何が変わったのかということがポイントだと思う。ほうっておくと子どもたちはまだ言葉が足りないのでよく理解できないが、そこを指導者が一緒になって振り返ってあげて、本人に何が変わったのかということを感じさせてあげる。③は冒険の下地をつくる、心の安全をつくるといったことで、最初に約束をする。私の場合は汚い言葉や下ネタは一切厳禁にして、励ますことばを子どもたちにたくさん考えさせる。それを活動の中で適宜使わせるということを最初に約束して、活動ごとに振り返っていくのだが、これが思いのほか効果があるので、ぜひ試して欲しい。たかが言葉だが、非常に効果がある。④のマスターするまで遊び込むは、今は1つのことをとことん遊び込むという時間がないので、贅沢だが、そういった時間をどうやって確保するかということである。⑤は褒めること、励ますことである。サッカーのセルジオ・エチゴさんはサッカー教室で特別指導をする時、うまくできない子どもに動き方のアドバイスをしてからやらせてグッドと言ひ、次にやったらエクサレントと言ひ、最後はワールドカップクラスと言ひ。そうすると子どもの顔がどんどん輝いていくが、3ヶ月後に行くとチームの指導者がいつものようにどなっているという現状があるそうだ。そういうことばで褒める、励ますということは、豚もおだてれば木に登るじゃないが、そうやって子どもたちは伸びていくのではないか。⑥のダメと言わないは、一番最初にぶつかった壁であり、チャレンジしたことである。あぶないからダメとどうしても言いたいが、それをどれだけ我慢で

きるかという我慢比べみたいなのである。そうやって観察していると、意外と子どもたちが持っている危険に対する防衛本能でここから先へは危険なので行かないと判断する。その判断を、大人を信頼して行かないより、自分で感じて決めた方が、災害のことにも繋がると思う。誰かに逃げろと言われて逃げるのではなくて、自分が逃げなければいけないという危機感を持って逃げると、自分がいのちを守る主体になる。そういう意味では、何でもかんでも上からダメと言うと、ダメといった人がいのちを守ってくれるということになるので、なるべく言わない。非常に葛藤がある。自己判断能力を高めたい。⑦のNo pain, no gainは、自然は痛みも喜びも両方与えてくれるが、その主体は自分自身なので、そういったところから、痛みになるか喜びになるかは自分次第という中で、自然の教訓を学んでいく。人間が痛みを与えると体罰になるが、自然からでは体罰にならないので、今はちょうどいいと思っている。

(草島) 今の遠藤先生の話聞き、このスライド(遠藤氏の図14)を見て、両目、両耳が痛い。学校教育現場では、もしかしたら7個中かなりの数が逆の方向へ行っているかも知れない。学校の先生は教えるのが大好きなので、こうしなさい、あしなさいと言ってしまうがちだし、あれはダメ、これはダメと言って、本当に子どもに何をさせてあげているのかと思う。それはもしかすると体育だけではなくて、色々な教科や生徒指導においてもあるのではないか。私も、もしかしたら娘にダメと言っていることの方が多いかも知れない。そう考えると、子どもは家でもダメと言われ、学校でもダメと言われている状況があり、遠藤先生の言う「自分自身で何かを考える能力」をもしかしたら、あまり働かせないようにしてしまっているのではないかと思った。

(伊藤) ここから、フロアーから質問を頂きたい。今回のテーマは昨今の体罰問題と深く関係すると思うが、このシンポジウムではその件は

省かせて頂きたい。

(岡崎) 大阪体育大学の岡崎です。3人の先生がたに共通する言葉としてはエンパシー(empathy)、共感力ではないかと思う。高塚先生は、まさにそのエンパシーを引き出したり、養ったりする実践を実習や体験学習の中でされている。遠藤先生は、自然の中での自分の感覚や体感を丁寧に経験させることで、初めて人と共感できるということを主張されていると思う。草島先生の場合は、先生が生徒にどう関わっていくのかというスタンスがエンパシーだと思う。ということで、3人に共通するのはエンパシーであると勝手にまとめてみたが、このエンパシーの反対は自己満足や自分勝手であり、自分勝手は相手の立場を認めないことになる。そして結局、体罰問題に繋がっていくことになる。3人の先生がどうやって自己満足の状態を学生達に乗り越えさせていくのかをお聞きしたい。高塚先生には、非常に偏差値の高い学生達が、レッスンの中で殻を破る瞬間があるはずだが、その瞬間はどういう時なのか、その機会をどう演出しているのか、遠藤先生には、自然の中に子ども達を連れて行っても、すべての子どもが自己開示するわけではないと思うので、そういう時にどうやってそこを乗り越えさせているのか、草島先生には、大変な生徒とどういう関わり方をしているのか、大変な生徒達とどう方法で共感していくのか、ということをお聞きしたい。なぜかという、体育では、相手の体と心にシンクロ(同調)することがベースにないと、何の技術も教えられない。例えば、蹴上がり時に、こどものスイングのタイミングやリズムや力の入れ方などにシンクロしながら補助すると、こどもはサッと出来るようになる。しかし、シンクロできない(相手のからだになってみるができない)と、補助もできない。そういう点でいうと、シンクロする、共感するということは、体育の中で最も必要なことのひとつと思うが、それを先生がたは実践の中でどう作りだしているのかを、お聞きしたい。

(高塚) コミュニケーションには、多くの定義づけがあるが、私はとりわけ他者の感情を理解して、違いを大切にしていくという感情面に力点を置いた捉え方をしている。医学科には学習成績の良い学生がやってくるが、その学生がキャンパス内で人と対峙するとき、どうしても学生同士では構えがとて強くなる。これは高校の現場の時も同じであった。そこで私は、まさに立つ位置の違う小さな命(赤ん坊)に寄り添わせた。赤ん坊と言葉のやり取りが全くできないので、非言語のコミュニケーションを用いて、感情を読みとっていかねばならない。赤ん坊は赤ん坊なりに、幼児は幼児なりに、思いを大人とは違ってストレートに学生にぶつけていく。そうすると学生は葛藤する。特に医学科の学生はそういう葛藤場面から逃げて来た、あるいは、さまざまな人間関係の体験を横に置いて、まずは受験勉強という形で生活してきた。医学部医学科には何年も浪人したという学生が入学してくるが、様々な人との葛藤場面を体験していない学生も少なくないので、思うようにならないという場面に向かい合わせると、彼等は悲痛な叫びを学習記録シートに綴る。私の場合は、高校の現場と同じように、全員引率していく。100名を超える医学科の学生をいくつかの施設に分散させるのではなく、一か所に集中させる。100名の医学科の学生が一つの保育園にお世話になる。0歳児が100人いることはないので、1歳から3歳ぐらいまでの幼児と向き合わせる。私は学生一人ひとりの様子をつぶさに間の当たりにしたり、学習記録シートの中で葛藤などを書き綴っている学生がいたり、後から大学で学生を呼び寄せ、葛藤をどう処理していくかなどのフォローをしている。今の子どもから若者は、限られた人間関係の中で生きてきているので、様々な人間関係体験は未熟である。とりわけ、核家族や少子化の中で小さいのちや老いのいのちとの体験は未熟である。学生の関わりに寄り添うことで、学生の喜怒哀楽の感情を目の当たりにすることができる。そのあたりをすぐに、講義担当の我々が観察していて、学生のメッセージを汲み取りながら支援していくと

というのが私の教育プログラムである。

(遠藤) まず自己満足、自分勝手をどう潰していくかという質問であるが、そういう子どもはほとんどいない。会員制にしており、今自分がやっているプログラムの趣旨に賛同して、理解してくれている子どもが来るので、ほとんどそういう子どもはいない。単発で参加する子どものなかにはそういう子がいるが、そういう時にはすでに周りの子どもたちが、共感できる雰囲気を持っているので、子ども同士で解決できる。それから小学生、中学生といった小さい子どもなので、最初の約束といった、言葉の約束で対応できる。それから、自己開示を出来ない子どもに対してどう取り組むかという問題については、ゆるやかに、丁寧に、そして時間をかけるということしかない。スタッフを少し多めに手配しているので、場合によっては付きっきりになることもあるが、とにかく、ゆるやかに、無理やりやらせない、時間をかけて丁寧に向かい合っていくという形で取り組んでいる。

(草島) 私がやんちゃな子供との関わりの中で、一番大事にしているのは、「負けてあげる」ということである。最近かっこいい言葉を知った。「小事は情をもって処し、大事は理をもって決すべし」というものである。中学校の生徒指導においては、「この学校の生徒だからダメなこと」「中学生だからダメなこと」「人としてダメなこと」「命にかかわること」という4つの指導ラインを基準にして生徒とかかわっている。

たとえば「中学生だからダメなこと」を目の前の生徒がしていた時、普通は「こら、なにやってるんや。おまえら、あかんやろ」といって、引っ張って連れて行くと思うが、そういう時に、目を押さえながら「イタタタ、目にゴミが入った」などと言ってあげたなら、生徒はとっさにダメな行動を隠したり止めたりすることができる。正統派の考え方をすればこれはダメな指導の仕方かもしれないが、ただ、普段からほとんど誰の言うことも聞かないような生徒に対して小言を言い続けることの効果を考えると、その

瞬間に「人としてダメなこと」や「命にかかわること」を指導するのと同じようなレベルで先生に指導されることが、その生徒にとってプラスになるかということ、なかなか難しい現実が実際にある。それを、その瞬間にちょっと目にゴミが入ったということにしてあげると、そのやんちゃな生徒が本当に自分ではどうすることもできず、「かまって、助けて、愛して」と心から欲するような出来事を起こしたり、巻き込まれることがあった時に、私がかけてつけて「それはほんまにあかんで」と真剣に話をすると、「草島が言うなら」ということが往々にしてある。「負けたる」「ちょっと負けたる」「これは絶対負けへんで」という指導ラインを、どの瞬間においても常にブレさせることなく、信頼関係を積み重ねることが、やんちゃな生徒との「共感」の糸口であると考えている。

(伊藤) 次のご質問を頂きたい。

(北川) 幼児教室で仕事をしている北川です。遠藤先生の指導方法に対する質問というより、感想みたいなものである。私も日頃結構気をつけているが、つついっ分かっていて自分がいて、子どもが「何でなの」と聞いてきた時に、答えを言いそうになるが、言わないようにしている。それは、いろんな子どもを見ていて、実際にすごく出来る子のお母さんから話を聞くと、「答えを教えない」といい、聞いてきたら「図書館へ行って、一緒に調べようか」とか、何か一緒にやってあげるといように、子どもが自分で調べる環境づくりをしているというのを聞くことが多い。草島先生には教育実習でお世話になり、実は私も（雨といを）よじ登ったことがあり、そんな時に自分は「先生、さがしている」「自分を見つけてくれへんかな」とどっかで思っていた。また、草島先生に会いに言った時に、「どーん」という音がして、なんて言うのかと思ったら、「どうしたんや」と、怒るのではなく、まずどうしたのかと聞いているのがすごいなと感じた。私は、目の動きだけではなく、からだを使う動きも合わせてやるビジョントレー

ニングを行っている。順序だてて説明ができない、あるいはコミュニケーションをとるときに自分の言いたいことがなかなか言えないという子どもさんを連れてこられる場合があるが、ある程度通ってもらい、からだを動かしてあげることによって、順序だてて説明できるようになっていく。今回の「いのちを守る体育」に関連して、私の所では遊び感覚でやっているが、からだを動かす表現が、言葉の表現につながっていくように感じていたので、そのような事例があるなら教えて頂きたい。

(高塚) 北川さん、今お話しされて気持ちいいですか。皆が聞いていたので、満足ですね。子どもたちが言いたいことが言えないという表現をされた。鳥取大学の学生だけではなく、自分の思いを語らない学生を、8年間でたくさん見てきた。マイクを向けると、(首をひねるだけで) 何も答えない。コミュニケーションの中では、どうしても話すということに力点がいく。小学校や中学校の教育でも「人前で表現できる」「自分の思いが語れる人間に」というのを耳にするが、私は逆だと思う。私は大学教育のプログラム、小学校、中学校、高校の現場での講座、パパやママのコミュニケーション講座などをたくさん開いているが、「子どもさんの話をちゃんときいてあげて」と言っている。そうすると、北川さんが今自分の思いを語れたように、「お母さんは忙しいにも関わらず、私の話をちゃんときいてくれている」「ぼくを大切に思ってくれている」と感じる。私があなたのような若い頃には、書店に「話し方」の本がたくさん並んでいたが、今は7、8年くらい前から、「きく」という書籍がたくさん並んでいる。私の講義内でも7割ぐらいはきくことの大切さを伝えている。「しどろもどろで思ったことを言えない自分に対して、きちっとからだを向けて、やさしい眼差しで、おかあさんやおとうさん、北川先生がちゃんと話をきいてくれている」と子どもが感じることを繰り返し行くと、話せるようになる。逆は真なりで、これには確かな手ごたえがある。私が言えるのはそこである。き

いてあげるということが、後回しになることや、関心を向けられないことが、日本国中で意外と多いと思う。「おかあさん、ほら見て、きれいな夕日だよ」と言っても後回し。高校の現場でも「先生次の体育の授業の準備、何したらいいですか?」「ちょっと、手が離せないで、後で来てくれ!」と後回し。しかし医療の現場で患者さんが「先生!」「看護師さん!」と呼んでいるのに「今手がはなせないから……」と対応していたら大変なことになる。

(遠藤) 先ほどのKDギャップとDKギャップで、言えるけどできないが頭でっかちで、出来るけど言えないは説明不足である。子どもたちは「風がそよそよ」の「そよそよ」が分からないので、表現もできない。風を実際に体験すると、風を言葉で表現できるようになると思う。そういう意味で、からだを動かすというのは、感覚が色々働くので、その感覚で言葉にできるのではないと思う。毎回、活動の感想を書かせるが、楽しかったで終わってしまうことが多いので、それ以外の言葉でどう表現するかはトレーニングだと思う。テレビしか見ていなかったら、「風がそよそよ」が分からないと思うが、現場で体験することによって、感覚をことばに置き換えるトレーニングになる。全体的に語彙力不足だと思う。小学校で授業をもった時だが、(手のゼスチャーだけで) 言葉が出てこないということがあったので、小さい時からの経験の積み重ねが大切であると感じている。

(草島) 学習指導要領では、現在全教科的に言語活動を充実するように訴えている。私は、言葉を聞いたり話したりすることは大事だが、本当の人間関係として、ノンバーバルコミュニケーションというものが影響力があると思う。特に体育は、言語の異なる人同士でも、一緒にするとさわやかで楽しいものである。小さい子どもが、体を動かすことによってしゃべれるようになるということは大いにあり得る。そういうことをたくさん経験させるという意味で体育は大事だと思う。

(伊藤) 最後に、演者の先生から一言ずつ頂きたい。

(草島) このような場でお話するという経験が本当に貴重で、今日勉強させてもらったことが多かった。それを明日から中学生に返してあげないといけない。特に、あれだけ偉そうに理想論を語ったので、そのうちの少しでも、私の教員としてのキャリアの中で実現出来るようにしたい。

(遠藤) 少し災害に関連させて言うと、2年前の3月11日は多くの方が水死であったことから、水に対する自信を学校計画の中でも付けていかなければならない。体育や保健の授業でも、救助法や蘇生法をやっていると思うが、それは単に技術を身に付けるだけではなくて、いざという時にはお互い助け合うのだというところまで発展させて行く必要がある。一回だけではダメで、時々お互いに助け合う訓練を行うことによって、いざという時に実践に結びつくと思う。

(高塚) 皆さんの大学では、人間関係はどうですか。私も大学に8年勤めているが、人の間に生きるということがこういうことだという術を、家庭や地域の中で自然に育まれる時代ではもうないと思っている。小学校や中学校でも、先生が心を痛めている現場がたくさんあるし、職場に若者が勤めても、すぐにリタイアしてしまう。それも人間関係の問題である。人の間に生きるとは、自分も大切だがそばにいる人も大切にすることであり、人との関係性や生き方も含めて、そういうことを意図的に学習プログラムとして展開していかなければならない時代が来ているのではないか。それを日本中の大学医学部が試行錯誤しながら、先頭をきって道をつくっているのではないか。学生同士で向き合い・関わりあうときは、ややもすると構えや緊張があるので、鳥取大学では、小さないのちに向かい合わせ、ノンバーバルなコミュニケーション

を経験させている。我々は言葉のコミュニケーションに頼ってしまうが、赤ちゃんは髪の毛1本から、足の爪先まで、全身で自分を表現しているので、そういうところを感じ取れるような気づき・学びの場も必要だと思う。今の時代、核家族も多く、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒に生活しない若者もたくさんいる。赤碕高校での取り組み、鳥取大学でのヒューマン・コミュニケーション教育が参考になると幸いである。小、中、高、大学において、ヒューマン・コミュニケーションに関係する意図的な学びの場が必要な時代だと思う。

(伊藤) 今回のテーマを決めてから、重いテーマなのでどのようになるか心配だったが、貴重なご意見を頂いた。先生方から頂いたさまざまな提言、助言を参考にして、大阪体育学会で新しい、ほんとうにいのちを守る体育をまた考えてみるいい機会を作って頂いたと思う。私自身は次のように思った。体育からからだというものもしっかりと捉える必要があり、それは立体的なからだではなく、精神的、身体的、社会的という、からだ、こころ、人間関係のすべてを含めたトータルとしてのからだだと、私たちはいつも向き合って、子どもたちとともに作り上げていく教育だと再び考えた。そして、子どもたちにとって体育は自分のいのちを守るために大事だということを、我々指導者がきちんと説明できる力を持つ必要がある。先生が変わらなければ、子どもも変わらないので、我々が、次にどうすればいいのかということを、少しずつ作り上げなければならないと思う。伊藤章会長は常々、説得力を持つということをよく指導の現場で使っているが、やはり小さな子どもからお年寄りまで、運動するということはどういう意味を持つのかということを説得できるような指導者でなければいけないとあらためて思う。そして、体育の現場で携わるものとして、いのちを守っていくということを我々の大きな課題として捉えていかなければならないと思った。